

いつのことだか、ある年、大洪水があつてな、濁流が山のように押し寄せ、あつという間に、梨畑も家も土蔵も流されたと。

婆さんは、逃げ遅れて屋根に登つたが、だれも助けることはできなかつたんだと。手を振つて助けを求めていただけんじよ、あれよあれよといううちに遠くへ流されて見えなくなつてしまつただと。

南の方は、逆巻く濁流にのまれ、中島の森もすっかり無くなつてしまつた。おつかねえ洪水だったが、幾日か経つて泥水が引きやれやれと思つた時、お稲荷様もなくなり、あたり一面石川原になつたんだと。

この洪水のことを、少しづつ忘れかけた頃のある日の夕暮れに、小川某という人が、若松からの帰りに、大川の板橋を渡んべとしたら、何だか、急に体が重くなつたんだと。

「あれ、なんだべ。」

注一
といぶかり自らやつとのことで向い側の蟹川土手にたどり着いただど。